

# 平成24年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告

## —若王子古墳の確認調査(2)—

岩田 明広

### 1 はじめに

埼玉県立さきたま史跡の博物館では、平成21年度から、埼玉古墳群と周辺遺跡群との関係を解明し、今後の史跡整備及び調査・研究の基礎資料とするため、「埼玉古墳群周辺確認調査」を実施してきた（第1図）。

平成21年度には古墳の所在の記録や伝承が残る埼玉古墳群南西側の水田域を調査し、当該地区に古墳が所在しないことを明らかにした（佐藤2011）。平成22年度には、昭和44年撮影の航空写真に、表層土壤の変色範囲（いわゆるソイルマーク）として写っていた円墳跡の調査を行い、変色範囲に一致して3基の円墳跡を確認した（これらには埼玉8～10号墳と名称を付した。佐藤2012）。

平成23年度には、戦後米軍が撮影した航空写真（第2図）のうち、埼玉古墳群東側約700mの水田域に写り込んでいる大形の前方後円形の土壤変色範囲について調査計画を立案した。その後、有識者等で構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に確認調査の実施について諮り承認されたため、当該箇所周辺の調査を「埼玉古墳群周辺確認調査」の一環として国庫補助事業で開始した。この位置は、かつて「若王子古墳」と呼称され、水田開拓のための埋立て土採取によって削平された古墳の所在推定地とほぼ一致している。隣接地には、若王子古墳同様に既に消失した大型円墳愛宕塚古墳が所在したといわれ、その東に近接した愛宕通遺跡では、発掘調査で内径10m程度の円墳跡3基が発見されている（瀧瀬1985）。近辺には同様に開拓で失われた古墳が複数あるといわれており（柳田1963）、若王子古墳を主墳に群集墳「若王子古墳群」を形成している。

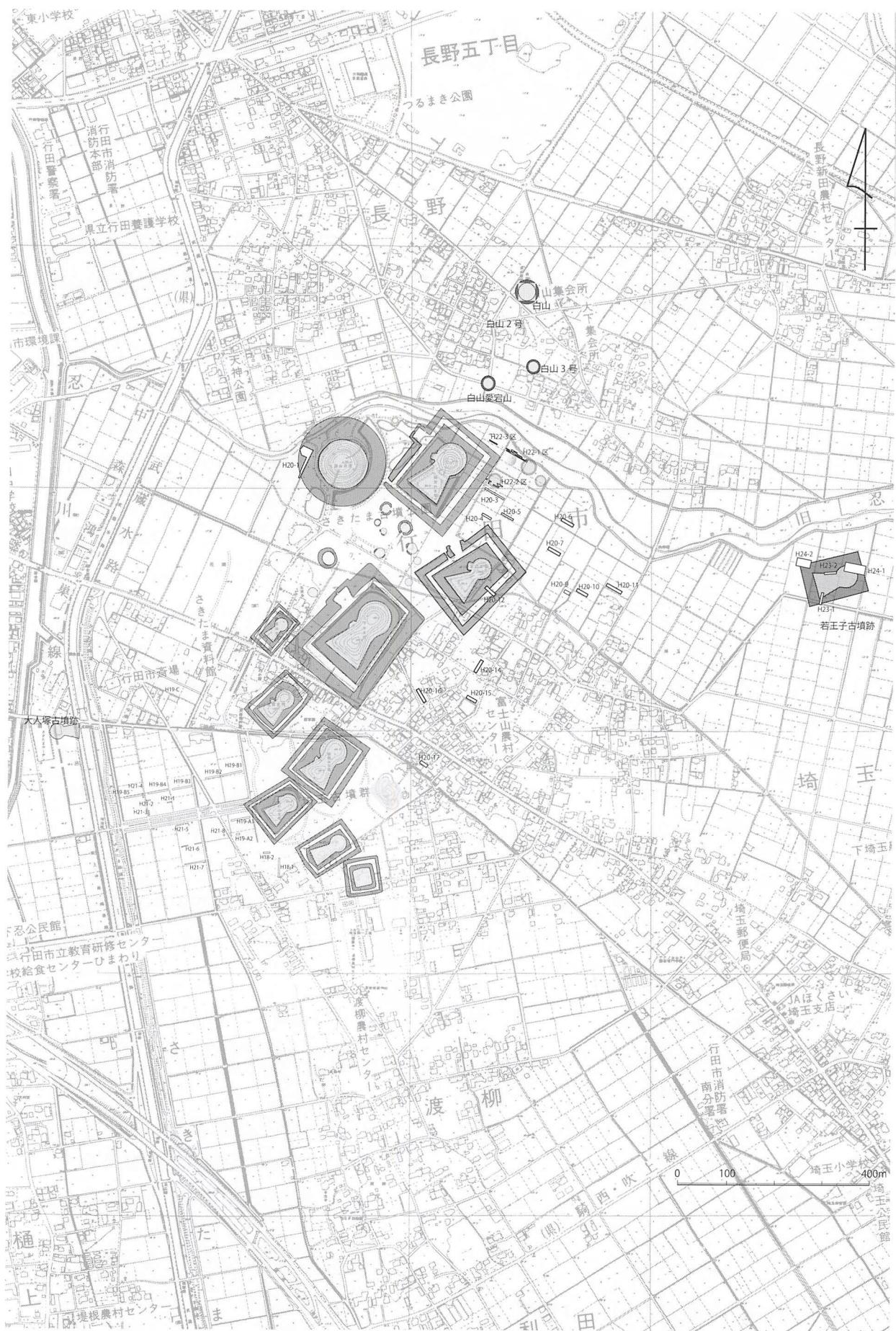
これらの古墳は、埼玉古墳群と埋没した小支谷を隔てていることが当館の平成20年度周辺確認調査でわかっており、現在のところ、東西1200m、南北500m程度の範囲に展開する埼玉古墳群とは異なるまとまりの古墳群であると認識している。

平成23年度調査では、旧来の知見及び土壤変色範囲の形状通りに大形前方後円墳「若王子古墳」が存在したことを明らかにしたが、具体的な古墳の規模や、わずか700mの距離に位置する埼玉古墳群との関係は明確になっていない。

今回（平成24年度）の周辺確認調査は、若王子古墳の規模や形状を把握し、埼玉古墳群との関係性の把握のための基礎的な情報を得ることを目的とし、有識者で構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に、平成25年1月27日に諮問し、了承を得て実施した国庫補助事業だ。調査総面積は62.74m<sup>2</sup>である。

### 2 若王子古墳に関する旧来の知見

平成23年度の確認調査で対象としたかつての若王子古墳所在推定地は、埼玉古墳群史跡指定



第1図 周辺確認調査位置図



第2図 米軍撮影の航空写真に写った若王子古墳の土壤色調変異範囲



第3図 若王子古墳平成24年度試掘坑位置図

地内で最も東寄りに位置する將軍山古墳から東に約700mの位置にあたる。

現在の地勢は東流する旧忍川に沿って緩やかに東に傾斜する平坦地で、若王子古墳についても、一見指定範囲となっている埼玉古墳群と同一群を構成するようにみえる。しかし、古墳時代中期頃までは、利根川河流（本流・支流のいずれかは不明）が現在より西側で荒川方向に下っていたため、現在の行田市域には、利根川系に属する中小河川やかつて旧忍川北側に所在した小針沼のような湿地が多く分布していたと考えられる。現在に比べ微地形が発達していたと思われ、平成20年度の周辺確認調査の成果では、將軍山古墳の東200m程度の位置に窪地が入ることが推測される結果が得られている（西口・佐藤2010）。

若王子古墳は、地元の方々の証言から、食糧増産期の昭和9年頃、埼玉古墳群稻荷山古墳の前方部と同様に小針沼干拓のために削平されたことがわかっている。墳丘の形状がわかる記録には、昭和5年に撮影された航空写真があり、隣接する大形円墳の愛宕塚古墳とともに明瞭な大形前方後円墳の姿を残している（栗原1971）。

文献記録上の若王子古墳をみると、1835年（天保6）に洞李香齋が著わし、1840年（天保11）に岩崎長容が増補した『増補忍名所図会』に、若王子古墳石室が崩れ内部で刀装具等が発見されたことが記されている。1906年（明治39）には発掘調査が行われており、1936年（昭和11）の『史蹟埼玉』には「羨道南に向ひ、左右浮石を積み上げ長約20米（11間）奥に石櫛あり、後壁は長約3.6米（12尺）幅2.7米（9尺強）厚24厘（8寸）の緑泥片岩を以て囲み、左右両壁は浮石を積み粘土にて堅め、天井は長3.9米（十三尺）幅2.7米（九尺強）厚30cm（1尺）の緑泥片岩を以て蓋ひ、内部に縦3米（10尺）横1.3米（四尺）」の石棺を配置す。」と記されている（高木1936）。この折の出土遺物は、甲冑残片、馬具、刀剣残片、土器などとなっている。

石室の奥壁と天井石は、前玉神社に建立された日露戦没記念碑、忠魂碑として利用されている。これらの記録と残された石材の状況から、石室構造について関東の石舞台とされる巨大な横穴式石室で知られる若小玉古墳群の八幡山古墳との類似性に言及する考え方もある（田中・小川1984）。

小針沼干拓工事のため墳丘盛土が土取り掘削された1934年（昭和9）にも、土器と刀剣の残片が出土したとの記録がある。

旧若王子古墳の墳丘規模等については、先に紹介した『史蹟埼玉』に「この墳現今は墳址として水田となりしも、最近までは前方後円墳として大なるものであった、もと前方部に忍藩火薬庫が置かれてあったのだ、土人は焰硝庫山といった、前方部の高さ三米、後円部七.四米、長径九五米、横径前方部五六米、後円部四四米、周囲二八〇米あった。」と記されているが、近年、杉崎茂樹が古地図の地割や土地利用状況をもとに、主軸長の墳丘長約103m、後円部径約52m程度と推測した。杉崎は同時に、出土遺物から築造年代を須恵器型式のTK43～TK209型式併行期にあたると考えた（杉崎1986）。

出土遺物は、瀧瀬によってもTK209型式併行期とみられており、八幡山古墳に近い年代が与えられている（瀧瀬1985）。

戦後の米軍による空中写真から把握できる外見上の特徴では、若王子古墳は旧忍川の河流に沿って主軸を東北東にとるが、埼玉古墳群では北東を主体にしており、やや異なる印象を受け

る。とはいっても、中の山古墳とは類似の指向性をもっており、鉄砲山古墳や奥の山古墳等とも近い指向性を指向しているとみることもできる。行田市周辺の大型前方後円墳は旧利根川及び利根川支流の河流方向に沿った指向性を指向するものが多く、大半が南東から東北東に後円部を、北西から西南西に前方部を向いている。主軸方位の比較では、埼玉古墳群の特徴がより明瞭となるが、若王子古墳（群）と埼玉古墳群が完全に異なる古墳群であり、無関係だとするほどの根拠はない。また、米軍空中写真をみると、若王子古墳の周囲は盾形ではなく、長台形を呈しているように見え、埼玉古墳群との関係性を考慮せざるを得ない。

米軍空中写真の表層土壤変色範囲が、実際の古墳の大きさや形をどの程度反映しているか証明できていないが、仮に台形の周囲をもち、主軸長で100mほどの前方後円墳が所在していたとすると、埼玉古墳群等でも将軍山古墳を越え、鉄砲山古墳に次ぐ規模となる。埼玉古墳群を考える上で、若王子古墳の存在はきわめて重要だ。

### 3 平成23年度の「若王子古墳」確認調査成果概要

平成23年度実施の埼玉古墳群周辺確認調査成果についてはすでに報告されているが（佐藤2012）、今回の報告と合わせて若王子古墳の全体像を把握できる重要な情報であるため、以下に概要をまとめておく。

#### （1）調査期間

平成24年3月6日～平成24年3月22日のうち計7日

#### （2）調査箇所

遺跡名：包蔵地外

地番等：埼玉県行田市大字埼玉1968番地、1970番地、1971番地1・2

これは、前方後円形の墳丘の前方部南側角と、北側くびれ部にあたる。

#### （3）調査主体及び組織

調査主体 埼玉県立さきたま史跡の博物館

調査組織 館長 井上 肇

副館長 鈴木 進

主席学芸主幹 田中英司

史跡整備担当学芸主幹 関 義則

史跡整備担当主任学芸員 末木啓介

史跡整備担当主任学芸員 佐藤康二（調査担当者）

#### （4）調査方法

掘削及び埋め戻しは、すべて雇用作業員の人力で実施した。

平面測量は、G P S 測量による平面図測量及び標高測量を委託事業として実施した。

断面測量は雇用作業員によって実施した。

### (5) 調査成果の概要

前方後円形をなす土壤色調変異の痕跡から、前方後円形の墳丘が東側に後円部を向け、東西方向に伸びた状態で所在していた可能性が高いことがわかつていたため、平成23年度調査では、前方部墳丘跡該当箇所の南側角及び周堀外側立ち上がり付近を1区、北側くびれ部該当箇所を2区として調査区を設定した。

一部の畠地を除くと、大方が水田として利用されている場所であったため、掘削は現代水田作土・床、旧水田作土を除去し、場所によっては必要な深度までの掘削を行った。

1区では、後世の攬乱や盛土がはげしく、成果を得ることができなかつた。

2区では、墳丘くびれ部から前方部に該当する箇所で、墳丘盛土及び旧表土層削平下の関東ローム層中への掘り込み痕跡を確認した。関東ローム層上面の掘り込み部分との層界は明瞭で、関東ローム層の分布の有無で判断した。

平成23年度調査の結果は、米軍撮影の航空写真にみえる土壤色調変異痕跡が失われた若王子古墳の痕跡であることを示すもので、方形をなすようにみえる周堀相当箇所の土壤色調変異についても同様の見方が成り立つということだ。

同時に、次の点が課題となつた。

- ・ 古墳の遺存状況の把握
- ・ 墳丘形態・規模・主軸方位等の把握
- ・ 周堀の形態・規模の把握
- ・ 出土遺物の年代

## 4 平成24年度周辺確認調査報告

### (1) 調査期間

平成25年2月21日、22日、25日、26日、27日、28日の計6日間

### (2) 調査対象地

遺跡名：包蔵地外

地番等：埼玉県行田市大字埼玉1958番地、1959番地、1975番地1

### (3) 調査主体及び組織

調査主体 埼玉県立さきたま史跡の博物館

調査組織	館 長	浅野晴樹
	副館長	鈴木 進
	副館長兼主席学芸主幹	今井 宏
	史跡整備担当学芸主幹	関 義則
	史跡整備担当主任学芸員	岩田明広（調査担当者）
	史跡整備担当主任学芸員	佐藤康二

#### (4) 調査方法

##### ①調査対象地・調査区

調査対象地は、米軍撮影の航空写真の土壤変色範囲の色調境界線を中心に、上記地番のとおり選定した。調査対象地内に、幅30cmから100cmの11箇所の長方形試掘坑（トレンチ）による調査区を設定した。前方部南側角と北側くびれ部相当箇所を調査した昨年度に対応し、周堀規模とその形状、墳丘規模とその形状等の全体像を把握しようとするものだ。試掘坑には個々にT 1～T 11の名称を付した。

##### ②掘削及び埋め戻し

掘削及び埋め戻しは、すべて雇用作業員の人力で実施した。

##### ③掘削深度

掘削深度については、土地所有者及び耕作者等の地権者の権利、特に農作業に支障を来さないよう配慮し、耕運機の運航及び田植え機の運転に問題が生じない深度（現在の水田作土層）までの掘削にとどめることとした。このため、基本的な掘削深度は最大で20cmとなった。ただし、T 4及びT 9では、現在の水田作土が深い部分があったため、試掘坑内的一部で20cmの深度を越えて掘削せざるを得なかった。ただし土地所有者との協議の通り床土上面までの掘削に止めた。最大深度は28cmであった。現在の水田作土が厚かった理由は、現代水田筆界付近等で、トラクターの陸揚げのための土壤捻転が生じたためと考えられる。

##### ④遺構確認

現在の水田作土を掘削除去すると、酸化鉄が沈着した床土上面の層理面が露出する。この不整合面は、かつて若王子古墳の削平時に露出したいわゆる関東ローム層が露出したものか、その上に古墳削平後の圃場整備でシルト質細砂を盛土したものとなっていた。関東ローム層が露出した箇所では、この不整合面で若王子古墳の墳丘下部の未掘削部分と周堀境界を明確に確認することができた。

圃場整備で盛土された箇所については、その後の耕運機による耕作で関東ローム層のブロックと粒子が捲き上げられており、その平面的なおよその分布境界をもって周堀と墳丘下の未掘削部分との境界を把握した。

##### ⑤測量

断面測量については、任意の農道に埋まった径70cm程度の河原石を基準にオートレベルを用いた水平測量を実施し、後に石のレベルを前年度の委託測量成果と整合させて標高に振り替えた。すべて雇用作業員による手実測とした。

平面測量については、個々の試掘坑毎に任意の測量ポイントを設けて手実測し、後に測量ポイントと試掘坑周囲の形状をG P Sによる委託測量により、座標値を確認した。

委託測量した座標値は世界測地系に基づくものとした。

##### ⑥出土遺物の測量及び取り上げ

今回の調査では出土遺物は得られなかった。

## (5) 調査対象地の使用承認等及び誤発掘について

### ①土地の使用承認

調査対象地の使用承認等については、事前に土地所有者及び耕作者等の地権者に有印文書による承認を得た。

### ②無許可の誤発掘について

行田市大字埼玉1958番地について、使用許可を受けずに調査を実施してしまった。

公図と現地の対応が明確でなかったため、その対応関係の判断を誤り、調査の承認を得ていなかった1959番地と取り違えて1958番地の調査を実施してしまったものだ。

土地所有者及び耕作者の抗議を受け、即座に事実関係の確認と謝罪及び事後処置の協議を実施した。協議に基づき、即日測量の上、耕作者の要請に基づき0.25級バックホウによる顛圧埋め戻しを実施した。

耕作者及び土地所有者には、大変な御迷惑と御心配をおかけした。本報告に記して改めて深くお詫びするものとしたい。

## (6) 調査日誌

平成25年2月初旬 発掘調査対象地の選定及び土地所有者・地権者の調査承認手続きを実施

同 2月21日 1975番地1及び1958番地に試掘坑T1～T11を設定

T1～8掘削及び平面・断面測量・T4以外を写真撮影

作業員13名

同 2月22日 1958番地のT5～T8の誤発掘が発覚

土地所有者及び地権者に現地確認の後謝罪及び協議、即日協議内容に基づき0.25級バックホウを用いて顛圧・埋め戻しを実施

1959番地に試掘坑T10・11を、1975番地1にT9を設置し掘削開始

1975番地1のT1～T4及びT9の調査終了

作業員13名

同 2月25日 現地と測量図の付け合わせ及び修正作業を実施

作業員2名

同 2月26日 T1～T4, T9, T12の埋め戻し

片付けを終え、すべての作業を終了した

## (7) 発掘調査の結果

墳丘は失われても地中に遺存すると思われる若王子古墳跡について、周堀形状を把握するために、前方部周堀外側立ち上がり付近にT1～T4及びT9の試掘坑を、また後円部主軸上の周堀外側立ち上がり付近にT6の試掘坑を設定した。さらに、墳丘規模を把握するために、後円部主軸上及び後円部円周北側にT5、T7、T8、T10、T11の試掘坑を設定した(第3図)。

調査地点周辺は、戦中に広域にわたり水田開拓のための埋め立て土採取が行われており、関東ローム層内でほぼ水平に削平され、その上に水田土壤が形成されていた。関東ローム層(シ

ルト質細砂、灰黄褐色10YR4/2) 上の水田土壌は1～2層あり、上層は現在の水田であった。以下に各試掘坑を場所ごとにまとめ、詳細を報告する（第4図）。

#### 前方部周堀外側立ち上がり付近（T 1～4・T 9）

この付近はほぼ水平に削平された関東ローム層上に、現在の水田及び戦後期の2層の水田土壌が形成されていた。地権者との協議により、発掘調査は現在の水田作土の除去より下層は掘削しないこととなっていたため、現在の水田床土上面での遺構確認となった。

2層の水田土壌のうち、下層の水田の耕作が深く及んでしまっていた箇所では、下層から巻き上げられた土壌の分布状況で、埋没している遺構の状況を把握した。

なお、T 4・T 9では先述のとおり、一部で現在の水田作土が厚く、当初予定した20cmを越えて28cm弱の深さで床土となるため、該当箇所はこの層の上面まで掘削した箇所がある。

検出した遺構は、関東ローム層を掘り込んだ後に埋没した周堀覆土とみられる土壌で、関東ローム層との平面的な境界として検出し、各試掘坑を繋いでいくと、西北西から南南西に直線的に延びていることが把握できた。前方部北側堀跡の形状や特徴について詳細に記述するだけの情報は得られなかったが、前方部のおおまかな形状や規模計測のための基準的な資料を提供できたものと思われる。

なお、いずれの試掘坑も外側に二重目の堀がある場合の状況を把握できるほどの長さで設定することが困難であったため、単堀か2重堀かについて判断できる材料は得られなかった。

詳細な試掘坑の状況は、次の通りである。

#### T 1

幅1m、長さ6.8m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は6.8m<sup>2</sup>である。現在の水田作土を取り去ったところ、下層にはさらに水田土壌が認められ、関東ローム層は露出しなかった。確認面では2箇所に現在の水田の耕作等にともなう掘り込み跡、もしくは耕作跡を発見したが、古墳関係の遺構は検出できなかった。

#### T 2

幅1m、長さ6.9m、深さ0.22mの平面長方形に掘削した。調査面積は6.9m<sup>2</sup>である。現在の水田作土を取り去ったところ、下層にさらに水田土壌が認められたが、この土壌は薄く、下層の土壌が上層の水田土壌中に浮き出しており、堀覆土とみられる土壌と関東ローム層の平面的な境界を把握することができた。南北方向の試掘坑中央に、東北東一西南西方向に検出した。確認面は現在の水田床土であり、表面に鉄斑が多く沈着していた。

#### T 3

幅1m、長さ2.1m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は2.1m<sup>2</sup>である。T 2同様、現在の水田作土を取り去ったところ、下層にさらに水田土壌が認められたが、この土壌は薄く、下層の土壌が上層に浮き出しており、堀覆土とみられる土壌と関東ローム層の平面的な境界を把握することができた。南北方向の試掘坑中央に東南東一西北西方向に検出した。確認面は現代水田床土であり、表面に鉄斑が多く沈着していた。

#### T 4

幅0.45m、長さ3.3m、深さ0.29mの平面長方形に掘削した。調査面積は1.49m<sup>2</sup>である。一部で現在の水田作土が厚く予定していた掘削深度の20cmでは、遺構を確認できなかった。このため、該当部分で28cm程度まで掘削し、現在の水田床土表面で遺構確認を実施した。この面で堀覆土とみられる土壤と関東ローム層の平面的な境界を検出した。南北方向の試掘坑北側1/3程の位置に、東北東—西南西方向に検出した。

#### T 9

幅0.5m、長さ5.3m、深さ0.23mの平面長方形に掘削した。調査面積は2.65m<sup>2</sup>である。現在の水田作土を除去して行くと、関東ローム層が露出した。しかし、試掘坑内の北側と南側では作土層が厚くなっていた。このため、現在の水田作土のみを一部で28cm程度まで掘削することになった。耕運機の陸揚げ地点とみられ、作土が厚く形成されたものとみられる。他の試掘坑にみられた周堀覆土と思われる土壤を試掘坑南端に認めたが、他の試掘坑で検出した関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤の平面的境界延長と異なる位置・方向となっていた。下層に埋没した近世以前の掘り込みや水田面への土壤堆積である可能性があり、遺構とは断定できなかった。

#### 後円部主軸上の周堀外側立ち上がり付近（T 6）

この地点では、硬くしまった現在の水田作土下に、水田開拓により水平に削平された関東ローム層と周堀覆土が検出された。作土のしまりは農業用機械の搬出入によるものと思われる。表土は現在の水田作土の1層だけであった。東側の農道に近づくほど作土が厚くなっていた。

T 6の北側10mの位置にも試掘坑を設けようとしたが、事前に行った小スコップによる15cm四方の掘削では、深さ20cmでは確認面に到達できる見込みがなかったため、地権者の水稻作業への影響を考慮し断念した。このため、後円部の周堀外側立ち上がりとみられる状況は、T 6の1箇所での確認となった。

詳細な試掘坑の調査状況は、次の通りである。

#### T 6

幅1m、長さ4.4m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は4.4m<sup>2</sup>である。現在の水田作土を取り去ったところ、下層の土壤が浮き出しておらず、堀覆土とみられる土壤と関東ローム層の平面的な境界を把握することができた。東西方向の試掘坑の東側1/4程度の位置に、南北方向に確認した。確認面は、現在の水田床土上面であり、表面に鉄斑が多く沈着していた。

#### 後円部主軸上及び後円部北側（T 5、T 7、T 8、T 10、T 11）

この付近は、水田開拓のため水平に削平された関東ローム層上に、非常に薄い現在の水田土壤が形成されつつある状態であった。

土地所有者及び地権者に発掘調査対象地としての許可を得ていない状態であったが、公図と現況との相違に気付かず調査を実施してしまった箇所を含む。誤発掘の試掘坑は既述のT 6の

ほかに、当該箇所のT 5、T 7、T 8である。

確認は地権者との協議に基づき、現在の水田の床土上面で実施した。当該箇所については、関東ローム層のうち、いわゆる関東ローム層が床土を形成しており、確認は容易であった。

検出した遺構は、関東ローム層とこれを掘り込んだ周堀跡の覆土とみられる土壤の平面的境界で、T 5の東西方向部分の中央付近から、T 7、T 8へと弧を描きつつ北西方向に向かい、T 5の北側水田の拡張区及びT 10、T 11で同じく弧を描きながら西に延びていた。出土遺物はなく、若王子古墳の年代を測る情報は得られなかった。

詳細な試掘坑の状況は、次の通りである。

#### T 5

後円部の形状を知るために設定したL字の最も長い試掘坑で、かつての墳丘主軸付近を水田筆界に沿って東西に幅1m、長さ25m、深さ0.18m（土が盛り上げてあった箇所のみ0.25m）の平面長方形に掘削し、ここから弧を描く後円部基底部と周堀覆土とみられる土壤の境界を北側へ追いかけて北側に直角に11m、さらに北側の水田に4m延長した。総延長は、40mに及ぶ。調査面積は25.0m<sup>2</sup>である。

現在の水田作土下は関東ローム層であった。その上面には現在の水田の床が形成されており、酸化鉄の沈着が認められた。試掘坑の東西方向部分で検出した後円部基部をなす関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤の境界には、炭化したゴミ層が認められた。周堀の窪みが遺存していた時に、堀内にゴミの投棄が行われたものと思われる。南北方向部分では、水田作土下は平坦な関東ローム層となっており、遺構は検出できなかった。

北側の水田に設けた拡張部分で、水田作土下に後円部基底部と周堀覆土とみられる土壤の境界を検出したが、出土遺物は得られなかった。検出した土壤境界は、南東ー北西方向に延びていた。

#### T 7

T 5で検出した後円部基底部と周堀覆土とみられる土壤の境界の延長とその平面形を、具体的に把握するために設定した試掘坑である。幅1m、長さ3.6m、深さ0.17~0.2mの平面長方形に掘削した。遺構は、後円部基底部をなす関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤境界を試掘坑の東端で検出し、東西方向の試掘坑内に、北西ー南東方向に検出した。東端は土壤境界を明確に確認するため、南側の掘削範囲を拡大したものだ。調査面積は3.6m<sup>2</sup>である。

確認面は水田土壤化した関東ローム層で、表面には激しい凹凸と鉄斑の沈着が認められた。

#### T 8

T 7同様、後円部の具体的な形状を把握するために設定した。幅1m、長さ3.7m、深さ0.2mの平面長方形に掘削した。調査面積は3.7m<sup>2</sup>である。現在の水田作土を取り去ったところ、後円部基底部をなす関東ローム層と周堀覆土とみられる土壤の平面的境界を把握することができた。東西方向の試掘坑の中央付近に、北西ー南東方向に検出した。確認面には多くの凹凸が認められた。

#### T 10

T11とともに後円部北側の平面形を確認するために設定した。幅1m、長さ4.6m、深さ0.18mの平面長方形に掘削した。調査面積は4.6m<sup>2</sup>である。現在の水田作土を取り去ったところ、後円部基底部をなすとみられる関東ローム層が露出し、周堀覆土とみられる土壌との平面的境界を把握することができた。南北方向の試掘坑の北端付近に、東西方向に検出した。関東ローム層上面には現在の水田の耕作痕である激しい凹凸と鉄斑の沈着を認めた。

#### T11

後円部北側の平面形を確認するために設定した。幅0.5m、長さ3m、深さ0.2mの平面長方形に掘削した。調査面積は1.5m<sup>2</sup>である。現在の水田作土を取り去ったところ、関東ローム層が露出し、後円部基底部と周堀覆土とみられる土壌の平面的境界を把握することができた。南北方向の試掘坑の中央やや南寄りに、北東—北西方向に検出した。確認面とした関東ローム層上面の状況はT10と同様である。

### (8) 発掘調査の成果

平成23年度に実施した確認調査により、若王子古墳は今日も一定の深さの周堀を地中に遺しながら、航空写真で確認した地上の土壌色調変異範囲に所在していることが明らかになった。今回の調査では、その形状や規模がほぼ確定できた。既出の試掘坑の位置を示した第3図には、各試掘坑での土壌境界検出位置を基に、若王子古墳全体の形状を図示してある。

古墳の具体的な形状や規模で把握できた情報は、次のとおりである。

#### 《若王子古墳の基礎情報》

##### (形状)

###### ・墳形 前方後円墳

墳丘が失われているため、平面形での表現となるが、後円部は正円ではなく前方部側にやや伸びる馬蹄形に近い形状で、くびれが明瞭で長軸方向に長い前方部をもつ。埼玉古墳群中での山古墳や愛宕山古墳の墳丘の形状に近く、鉄砲山古墳にも類似している。6世紀後半から末頃の古墳の状況と考えられる。

###### ・主軸 N-70°-E

###### ・周堀 方形の单堀

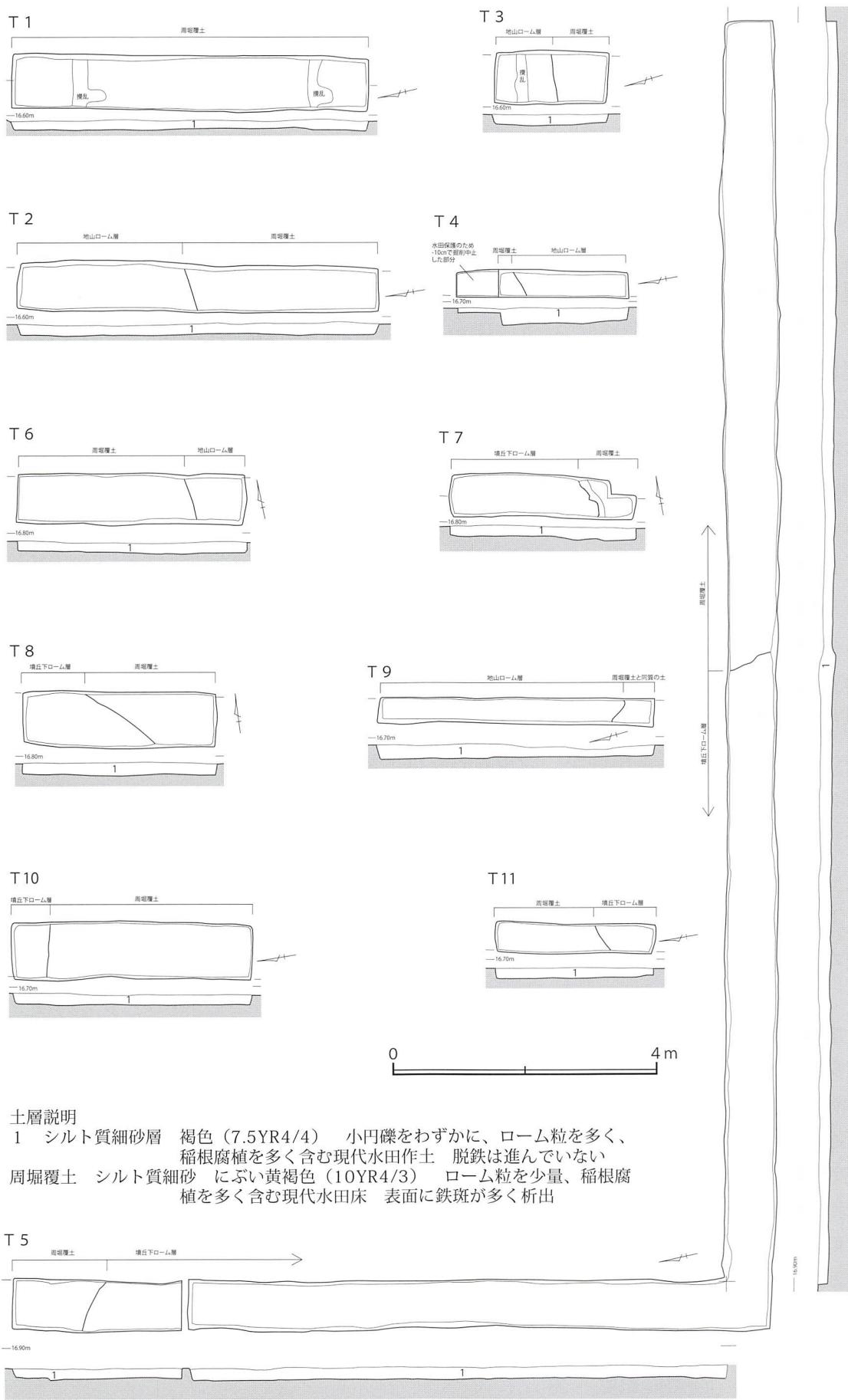
##### (規模)

###### ・墳丘 主軸上で長さ92m、前方部長さ48m程度、後円部径43m、くびれ部幅30m、前方部幅53m

###### ・周堀 後円部側幅77m、推測される長軸方向南側長さ140m、推測される長軸方向北側長さ140m、推測される前方部側幅95m

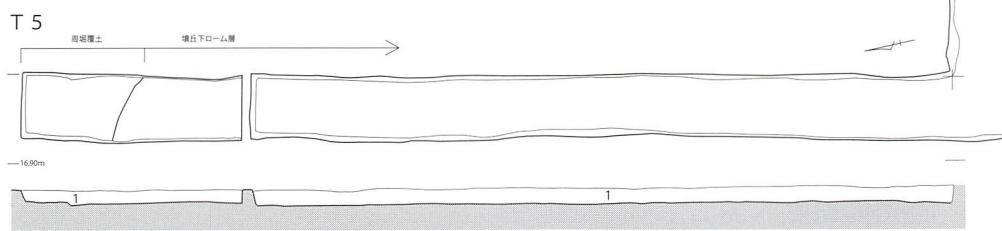
この数字は注意して扱わなければならない。今回把握した墳丘や周堀の規模は関東ローム層が一定程度削平された層準を確認面としたものだ。

佐藤の考察のとおり（佐藤2013）、埼玉古墳群内の小円墳、若王子古墳、愛宕通遺跡の小円墳の確認面の標高からみれば、周辺で微地形が発達するものの、埼玉古墳群から東の一帯の台



#### 土層説明

- シルト質細砂層 褐色 (7.5YR4/4) 小円礫をわずかに、ローム粒を多く、稲根腐植を多く含む現代水田作土 脱鉄は進んでいない
- 周堀覆土 シルト質細砂 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ローム粒を少量、稲根腐植を多く含む現代水田床 表面に鉄斑が多く析出



第4図 試掘坑詳細図

地上面は、緩やかに東方向に傾斜する平坦面を構成するものと思われる。埼玉古墳群中の鉄砲山古墳では、現在の旧表土上面は、武藏野台地のⅣ層ローム対応層（いわゆる関東ローム層：小田1980）より75cm高いレベルとなっており、ローム層の削平状況を考慮すると、さらに削平による標高差は大きいとみるべきだ。

墳丘法尻から周堀上端までにテラスが存在するか否かも、おそらく確認するのは難しい状況であり、関東ローム層削平層準を確認面とした今回の規模は、古墳の厳密な規模を示すものとはいえない。また、鉄砲山古墳のように墳丘法面がそのまま周堀壁面と繋がる構築方法の場合、墳丘規模が大きくなる場合があり、周堀を掘削した上で再度計測する必要がある。

ただし、平成23年度及び今回の調査成果から、若王子古墳は埼玉古墳群中の將軍山古墳とほぼ同規模の古墳として築造されたものだと結論づけることは許されるだろう。

平成23年度調査、今回の平成24年度調査とも、出土遺物がなかったため、若王子古墳の築造年代は明らかにできない。しかし、これまで把握されている出土遺物からの年代は、いずれもTK43からTK209型式併行期と考えられており、当該地域における前方後円墳の終末時期に相当する。埼玉古墳群にきわめて近接した位置の大形古墳を含む古墳群として、若王子古墳及び若王子古墳群は重要な位置を占めている。

埼玉古墳群は、個々の大形古墳の位置的関係から、群内で系統性をもって築造されていると捉えられることが少なくない（太田2007、城倉2011、関2012）。しかし、その近接性や方形の周堀の存在などをもって、他の古墳群を単なる周辺古墳群として扱うだけでは、埼玉古墳群自体の出現・展開・終焉の意義は把握できないのではないだろうか。

一つのまとまりのある古墳群が、周辺もしくは広域に展開する古墳群集地の中で、いかにして大形の前方後円型墳墓群を展開させ終末を迎えたかを知るために、若王子古墳の情報は、欠かせないものの一つといえるだろう。

若王子古墳の確認調査は今回をもって一旦終了するが、今後も折をみて、若王子古墳群をはじめとした周辺古墳群の調査を実施することで、より立体的な埼玉地域の古墳時代後期の動態が明らかになっていくはずだ。

### 《引用・参考文献》

- 太田 博之 2007 「武藏北部の首長墓」『武藏と相模の古墳』 季刊考古学・別冊15
- 小田 静夫 1980 「武藏野台地の火山堆積物と遺跡」『考古学ジャーナル』 100.pp12-20
- 栗原 文藏 1971 「埼玉古墳群の古航空写真」『埼玉考古』 第9号 埼玉考古学会
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
- 佐藤 康二 2011 「平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号
- 佐藤 康二 2012 「平成22年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第6号
- 佐藤 康二 2013 「平成23年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告—若王子古墳の確認調査(1)—」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第7号
- 塩野 博 2003 「『北武八志』と清水雪翁の考古学—発掘された埼玉「若王子古墳」をめぐってー」『埼玉県立博物館紀要』 28
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』 さきたま出版会

- 城倉 正祥 2011 『北武藏の埴輪生産と埼玉古墳群』
- 杉崎 茂樹 1986 「行田市若王子古墳について」『古代』 第82号 早稲田大学考古学会
- 関 義則 2012 「埼玉古墳群の構成原理」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第6号
- 高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』 埼玉村教育會
- 瀧瀬 芳之 1985 『愛宕通遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第51集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中正夫・小川良祐 1984 「各地域における最後の前方後円墳 東日本Ⅱ—埼玉古墳群周辺地域—」『古代学研究』 106 古代學研究會
- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号
- 柳田敏司他 1963 『古墳調査報告書』 第6編 北埼玉地区 埼玉県教育委員会



写真1 調査箇所のようす

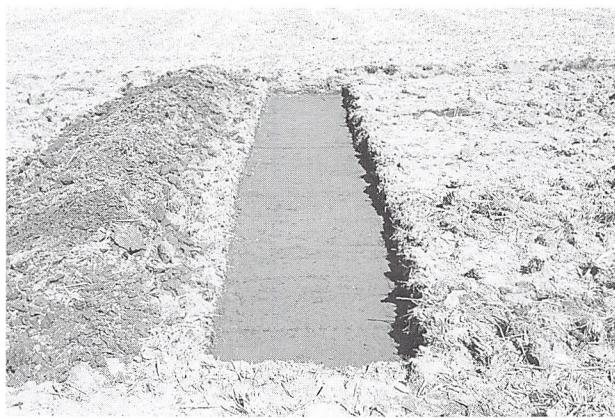


写真2 T1 (遺構確認できず)

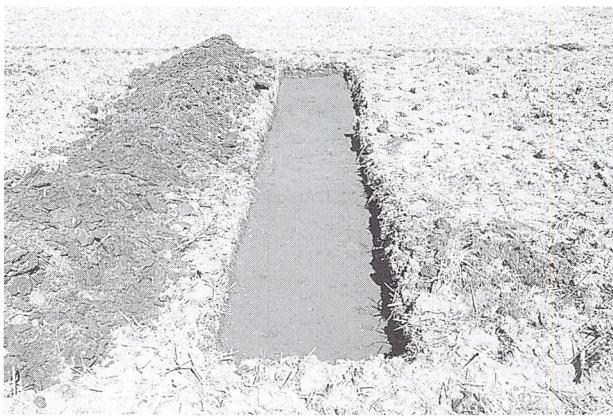


写真3 T2 (奥にローム土が分布)

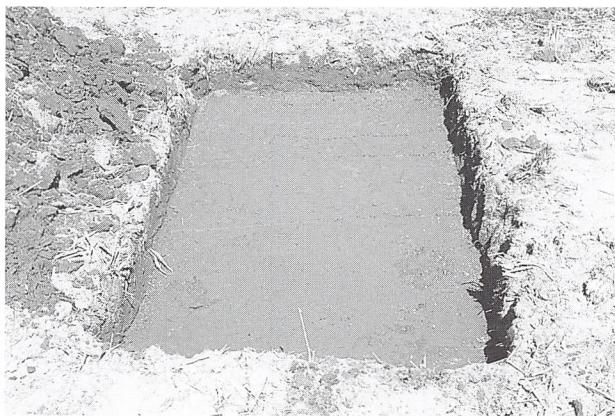


写真4 T3 (奥にローム土が分布)

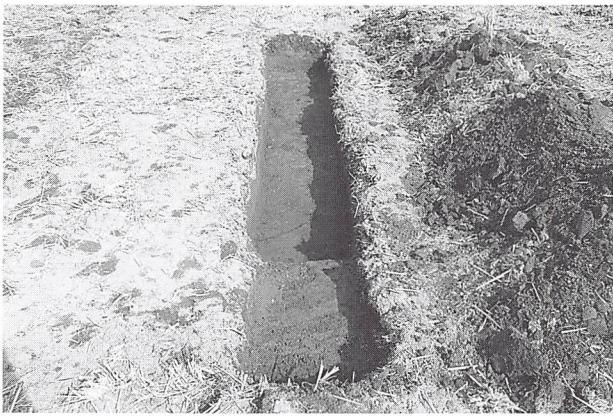


写真5 T4 (奥にロームがみえる)

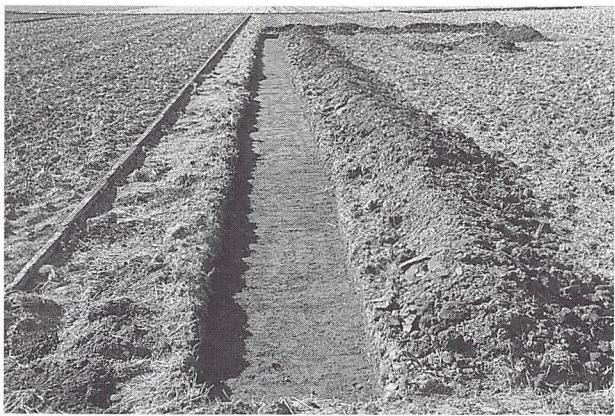


写真6 T5 東西方向部分(奥にロームがみえる)



写真7 T5南北方向部分(全体にロームがみえる)

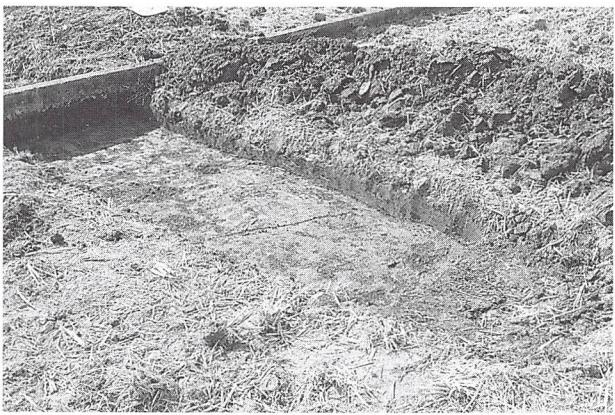


写真8 T5 拡張部分 (左手にロームがみえる)

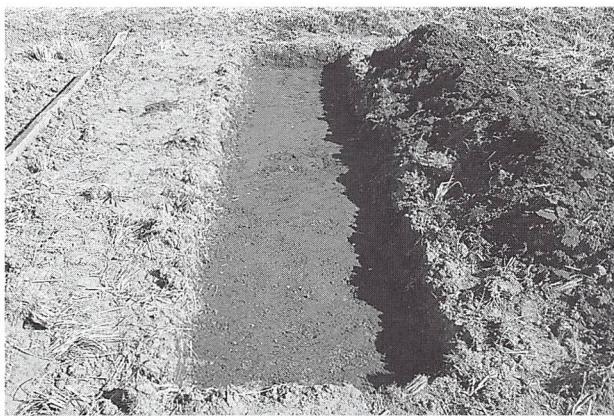


写真9 T 6 (奥にローム土が分布)

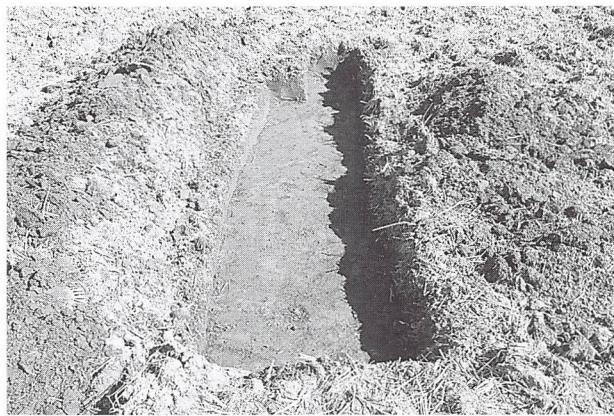


写真10 T 7 (手前にローム)

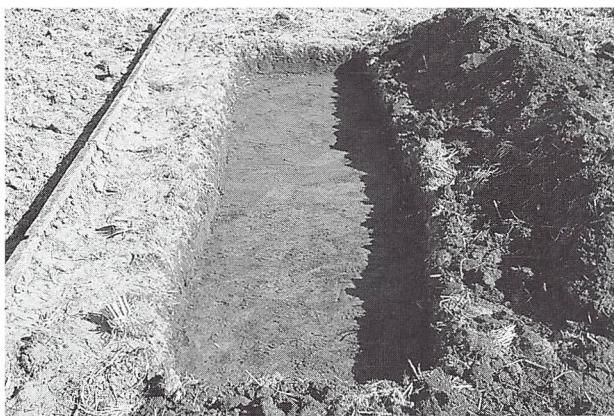


写真11 T 8 (手前にロームがみえる)

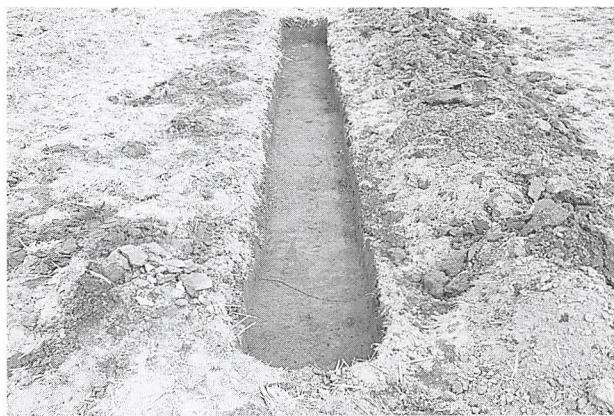


写真12 T 9 (手前が堀、奥がローム)

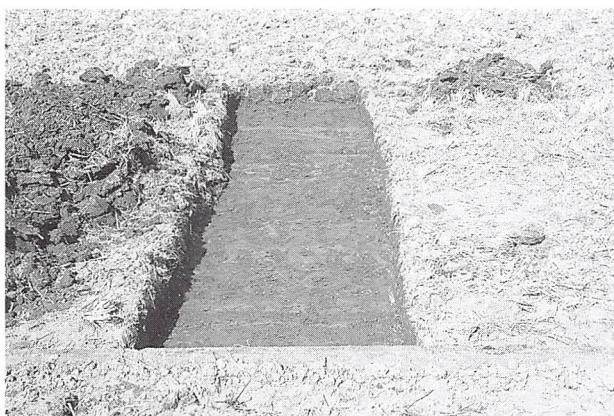


写真13 T 10 (奥に周堀覆土)

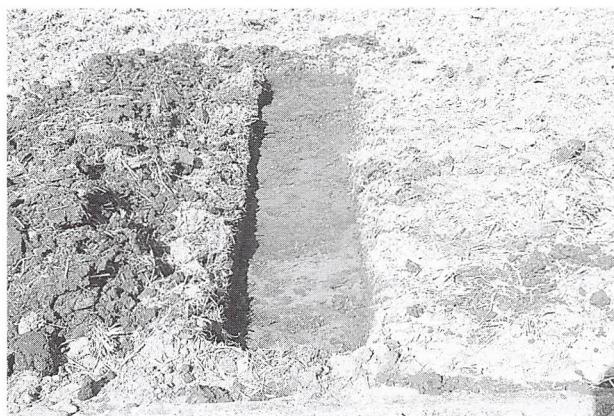


写真14 T 11 (手前がローム)



写真15 作業風景



写真16 作業風景



写真17 作業風景



写真18 作業風景



写真19 作業風景



写真20 若王子古墳墳丘のおよその形